

清水好子著『源氏の女君』書評

著者のことばによれば、「婦人学級や各種婦人のグループの方々に多く読んでいただく」（増補版「あとがき」）のが、当初の念願であったということである。著者のこの念願は、みごとに達せられた。そしていま、「このたび、そうした婦人の方々のおすすめで再版を考えることに」（同）されたことを、まず読者の一人として喜びにたえない。

西 木 忠 一

さて、『源氏の女君』の目次をみると、

第一部 藤壺宮

第二部 紫の上

第三部 宇治のおんなきみ

侍女たち

横川の僧都——自在の人——

源氏物語五十四帖の巻名とその内容

となつてゐる。読みごたえのあるのは、いうまでもなく「藤壺宮」・「紫の上」・「宇治のおんなきみ」の所であるが、とりわけ前二者ということにならう。

源氏物語桐壺の巻から雲隠の巻まで、いわゆる第二部の終末までにおいて、光源氏をとりまく女性達を考えてみると、それは多数である。葵の上、明石の上、六条御息所などと、いくらでも数えあげることができる。ところが著者は数名に限定した。第二部で登場し、光源氏と紫の上とを、ともに苦しめた「女三の宮」までも切り捨ててゐるのである。これは読者の抱く最初の疑問であらう。しかし、この疑問は読み進むにつれて、明らかに不足はせずである。光源氏をめぐる女性達が、いづれも藤壺の面影を求めつづける心情から、登場した人々であることがわかる。

著者は、源氏物語第一部において「藤壺宮」を、第二部においては「紫の上」を知れば、第一部第二部の真髓に触れることができるといつてゐるようである。

ここにおいて著者の源氏物語にむかう態度が、如実に示されてゐるといえるのである。

源氏物語第三部は、当然「宇治のおんなきみ」があがつて来る。なかでも大君・中君に対して、浮舟と二段に書きわけてあり、特に大君に筆のつくしてあるのも、読者として考えるべき点であらう。

加えて「侍女たち」から、当代宮廷社会における女性の日常生活がうかがえ、「横川の侘都」から、彼女たちの精神生活の支えがつかめるのである。

本書は源氏物語五十四帖の展開を見つづ、つかまねばならぬ点を、しっかりとつかませてくれる、最高の入門書である。私自身くりか

えし四度目を読みおえた今、第一部藤壺宮、第二部紫の上に、魅せられてゐる。そして、今後源氏物語にむかう態度を考えさせてくれる。ともすれば平面的に読まれやすい源氏物語の——特に第一部における——弊害を、みごとに救つてくれるのである。

それから、源氏物語における「秘密」の持つ重さを、感じさせられたのである。藤壺の不倫を秘密に保つたこと。光源氏が紫の上を北山から奪つて来たが、それは藤壺の姪ということの、紫の上自身の知らない秘密。女三の宮を中年になって迎えた光源氏に対し、女三の宮が藤壺の姪であるという、彼女の知らない点。加えてなぜ光源氏が女三の宮を迎えたかということの、何もその理由を知らない紫の上。その他。秘密が読者にはわかつてゐるといふ、光源氏と読者とが結びつけられてゐるところに、一つの興味をおぼえたのである。

ここで一二の気になる点を書きそえることにする。

今女院である藤壺はその会話の量さえ多い。秘密の色はうすれ、なまめかしい気配は去りつつある。その代わり、偉大な権力者になりつつある。源氏物語の人物描写の筆は場面によつて変わる。藤壺の变身・成長であらうか。物語の筋立の要請であらうか。(三九—四〇頁)

と、読者に疑問をなげかけておられる。本書では随所に「……であらうか。」と、読者に疑問を投げかけながら、続いてその解答の与えられている場合が多く見える。だが、この場合、それが与えられていないのである。やはり、ここにも著者の解答を与えてほしいものである。

次に、些細なことにわたって失礼ではあるが、

紫の上は藤壺の身代わりの人であるのに、彼女は怨むのである。

(四七頁)

という所の、「彼女」が「紫の上」であると読まれる危険はなからうか。もちろん、この文の数行前に

しかし、いま、藤壺のことを語ったのはそれとは正反対に、むしろ、紫の上に藤壺の面影を見出してのことであったのに、藤壺は怨む。

とあるので、その危険はなさそうであるが、……。(実験的に十名の人々に読ませた結果、二名が間違いをおかしたので、付記したものである。)

「紫式部」という女性の書きあげた「源氏物語」。その中に生きている「女君」。それをとりあげられた「清水好子氏」。他の者には読み通すことのできなかつたすどさが、各所に光っていることはいうまでもない。

著者は「婦人学級」や、「婦人のグループ」を念頭におかれて、パンを採られた。しかし、本書はそれだけの読者では終わらないものを持ってゐる。源氏物語研究を志す者はいうに及ばず、大学生にも、一般の人にも手にしてほしいものである。かならず、これまでに持っていた「源氏物語」に対する考えは一変し、およそ一〇〇〇年の昔から、読みつがれて来た源氏物語の魅力にうたれ、加えて、どうしてかくも読みつがれて来たかという、その理由もつかむことができ、真の源氏物語に触れることもできよう。

「入門書」と書いたが、そう呼ぶのが申しわけない気がしている次第である。

清水好子著『源氏の女君 増補版』(「塙新書」7・昭和42年6月5

日・塙書房・二〇〇頁・二〇〇円)。

著者・清水好子は、本学専任講師。